



義足の日本人パラリンピック選手(右)、
ロンドンパラリンピック解説者、
コリン・ジャクソン氏と



アトランティック・カレッジ卒業20周年同窓会に
てルームメイト(左)、友人(右)と

づくりに没頭した。このときの作品のなかで自分でも気に入っていたものを「カレッジに残してほしい」と言われ置いていったのだが、いまだに卒業生の作品としてイベントのときには飾っていると聞き、光栄に思っている。

▼体力の限界に挑戦、社会奉仕活動

UWCには、社会奉仕活動のカリキュラムがあり、私はビーチレスキューに所属していた。初のアジア人女子といわれていたが、真偽のほどはわからない。気温が一〇度以下で、たくさんの見物人が屋外プールを囲むなか、「身長一九〇cmくらいのロシア人男子が倒れた」という想定で私の番が来た。顔にワセリンを塗って準備をし、声援のなかでフィニッシュしたときには、もう怖いものはないと思っただけである。二年生のときには盲学校でカヌーを教えた。ビーチフラッグの大会にも出場し、銅メダルを獲得した。初のアジア人

女子メダルだと表彰式で皆さんから拍手をいただいた。AC卒業後、大学では水球部に所属し、日本でベスト8になったのだが、水球部での練習はビーチレスキュー時代をほうふつとさせた。

▼必要なことは

現在は義肢装具メーカーに勤務し、技術面も含めた日本での販売のサポートをしている。取引先との間では日本の慣習を尊重し、社内では日本がどこにあるのか知らないような人まで届く声で発言しなければならぬ。必要なのは、圧倒的なコミュニケーション能力と、誰をも納得させるエビデンスをストーリーに乗せて準備すること、それから数多くの海外出張に耐える体力であろう。子どもが生

まれてからは、家族で上海駐在も経験し、コミュニケーション能力と体力にさらに磨きがかかったように思う。

▼仕事を通じ、日々感じるいよこし

義足はパラリンピックのたびに認知度が上がり、注目されるようになった。会社は人道支援の一環で、ハイチの地震の復興支援やイラク戦争で足を失った米国人兵士への最新の義足パーツの提供なども行っており、今自分がしている仕事もそういった活動につながっていると感じている。

と同時に、二十一世紀になったのに世界は平和ではないという現実も突きつけられている。私の在学中にUWCの会長であったチャールズ皇太子が、ACへ訪問された際のスピーチの一節に、「国の名前を聞いたとき、友だちがいればその名前も思い出すだろう」とあった。「友だちがいれば行ったことのない国も身近に感じる」という主旨で、それは今も色あせていない、心に残る言葉である。心の柔らかな一〇代に、深いところまで突き刺さったたくさんの経験は、ゆるぎない価値観を生み出し、私をいまだに導いてくれている。志のある学生に、より広い経験をする機会を与えられるよう、私もサポートしていきたい。

体験が生み出すぶれない心

ÖSSUR ASIA 日本マーケット統括マネージャー

榎木祥子

にれき しょうこ

茗溪学園より一九八六―八八年UWCアトランティック・カレッジ(英国)留学。九三年筑波大学芸術専門学群インダストリアル・デザイン専攻卒業。建築設計会社に勤務後、二〇〇一年国立障害者リハビリテーションセンター学院義肢装具学科卒業。二〇〇一年義肢装具士取得(国家資格)



すでに、UWC卒業二〇周年の同窓会にも出席した私にとって、アトランティックカレッジ(A.C)での経験は、記憶のなかで何度も上書きされ、今ではコントラストのはっきりした思い出になっている。現在は、アイスランドに本社があり、ヨーロッパ圏出身の社員中心総勢一六〇〇名のうち日本人スタッフは二名の会社で仕事をしている。こういう環境にいると、一〇代のうちに「日本から遠い国の人」にどっぷり囲まれたことが、今の私の原点になっていることを強く感じる。記憶に色濃く残るA.Cでのエピソードをつづつてみたい。

▼自分で考え、準備、発表する授業

A.Cでの一年目と二年目を比べると、チャ

レンジしたことが別人のごとく違っていたと思う。それは自分の「英語力」が格段に上がったことが大きい。最初は、宿題が何かもよく聞き取れないところから始まったが、二年目にはIB(国際バカロレア)カリキュラムの「Theory Of Knowledge」でプレゼンテーションをし、質問に答えるまでになった。この授業は、まさに「プレゼンテーション」と「Q & A」のスタイルで、紙芝居のようなものを準備した記憶がある。当時はまだインターネッともなく、図書館にすらつと並ぶブリタニカ百科事典からいろいろな単語を調べてまとめるといった作業を、英国人の友人にアドバイスをもらいながら進めた。私は上級クラスのアートの授業を取っており、大学でも芸術を専攻したのだが、とにか

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五九名の卒業生を輩出している。

くA.Cでの経験が大学選択に大きく影響したことは間違いない。アートの授業では、一年目は先生の与える課題をこなす。二年生になると自分で作品をつくり、なぜその作品を制作しようと思ったのかについて、分厚いアルバムのようなノートに書いていく。IBの採点では、作品を試験官に説明するが、そのノートも評価の対象であった。私はそこで陶芸に巡り合った。陶芸には専門の先生(典型的なウエールズ人男性)がいて、とても厳しく、私を毎回問い詰めた。

しかしそのおかげで、ノートにたくさん書くネタができ、どんどんページが埋まっていた。言葉に対しても、「今言った単語の意味は？」など英語の先生より厳しかった。同じコンセプトのなかで、考えがまとまらざるぐる回っていると、作品を壊される勢いで否定され(焼く前の粘土は壊れやすい)、新たによく練られたコンセプトを提出したときには、「Not Bad」と言ってくれた。なぜ「Good」と言ってくれないのかなどと思いつつ、右手が腱鞘炎になっても、水で冷やしながら作品